

学びから得た「障害」についての理解 その3

新聞記事を題材としての試み

The Understanding on “Handicap” that Having by Education (part3)
The Teaching Using of a Newspaper account

関谷 眞澄

Masumi Sekiya

差別・偏見 普通とは いのちの重み 相互理解 体験と学び

1. はじめに

私たちが生活している社会において、バリアフリーという言葉はなじみ深いものとなっている。その視点は都市計画にも組み込まれている。例えば駅ではホームへのエレベーターが設置され、低床バスの普及、出入り口のスロープ、トイレの出入り口での音声案内、点字板、など都市部ではよく見られるものである。また個人の住宅設計においても、「バリアフリー」をセールスポイントにした住宅販売や、リフォームの際に段差をなくしたり、手すりをつけたりと、バリアフリーが広まっているように思われる。

このような現実のなかで、私たちはこの社会で一見障害を抱える人への理解がなされており、障害を抱えていても暮らしやすくなっていると、単純に思い込んでいる面もある。確かに移動などでの不自由さは軽減されてきている。しかし気づかれていない暮らしにくさや、不便さは多くある。それは不自由、不便をこうもっていない者にはみえにくく、「声」としてあげられるまでわからないことが多い。

生きにくさ、生活しにくさを引きおこすものは、社会にある「差別」「偏見」の目である。バリアフリーの有無にかかわらない。環境を整えたとしても、そこに優劣の意識が存在する以上、環境

は生かされず、形だけのものになってしまうだろう。

障害を抱えているというだけで、社会からいわれのない差別を受け、見ず知らずの人からも蔑まれ、排除されていた時代を知らない世代がいま多くなっている。障害者「障害を抱える人」という意味合いで用いていく）が基本的人権さえも奪われ、いのちの重みも軽んじられていた時代、社会がそう遠くない過去にあったことを知っている人はどれだけいるだろうか。

筆者が本学で講義を担当している学生は2年生であり、19才から21才が大多数であろう。彼／彼女たちは2020年前後に生まれている。車いすの人、白杖の人、盲導犬を連れた人など、障害を抱える人が街中にいることが比較的日常の風景となっている世代であろう。知的障害児／者、発達障害児も目にしている。手話、補聴器も知っている。マスメディアを通して「障害」「障害者」に触れてもいる。

筆者は毎年学生に講義のなかで「障害」「障害者」についてどう考えるかという主旨の問いかけをし、記述してもらってきた。講義をしてきて感じることは、「障害」「障害者」に対して学生の見方、捉え方が肯定的であるということである。「優しさ」とでも言うような気持ちが根底にあるように感じられる。学生に「差別」「偏見」をしてはいけないという意識は大きい。障害は「個性」

であり、否定すべきものではない、という考えもよくみられた。

しかし危惧されることは、「障害」「障害を抱えること」があまりに軽く捉えられてしまってもいる、ということである。それは「障害を持つ人は、別の才能をもっているから、不幸ではない」という言葉に代表される。また、障害を抱えることになったその人のつらさや失ったもの、家族の苦しみに思い至らない、そういうものがあるとは想像できないようにも感じられることがある。「障害」は克服できるものという見方が強く、克服するまでの葛藤やつらさ、長い時間が必要であること、克服できない人もいる、ということなどに気づかない。

すべての学生が前述してきたような捉え方であるとは言わない。ひとつの「傾向」にすぎないかもしれない。障害を否定的に捉える学生もいる。そして障害を抱えることの重みに目を向けている学生も少なくない。

ただ、「障害」「障害者」という言葉や事実に否定的な表現をしてはいけないという暗黙の意識が深くあるように思われる。それは「障害」とまっすぐに向き合う、考えることを阻んでいるように思われる。

2. 目的

本稿では障害者差別の時代を知らない世代といえる学生たちが、その事実に触れた時にどのように考えるか、どのような感情を持つのかを、新聞記事を題材として考察していく。

「障害」に対し配慮や支援がなされている事実だけでなく、「障害」が排除されてきた事実を知ること、「時代」の変化を視野に含むことがなければ、「障害」「障害者」を理解することにはならない。

また考察を通して、これからの講義のありかたも考えていきたい。

3. 授業の構成と題材

1) 授業の構成

筆者はこれまで「障害児保育」という授業科目名で保育士・幼稚園教諭を目指して入学してきた学生を対象として、授業を行ってきた。今年度「特別支援教育」と名目は変わったが、授業で目指すものは変わらない。それは、保育者自身が自らのこととして、「障害」「障害児／者」や「障害をもつ子のいる家族」を捉え、考えていく姿勢を培うことである。学生ひとりひとりが自分はどう思うか、なぜそう思うのかと考え、保育にかかわっていくようになってほしいと考えている。そしてもうひとつの目的は、それぞれの障害特性の理解や対応、保護者の心理など、基本的な知識の習得である。

授業のなかでは新聞記事や障害児やその家族を描いた書籍などを活用し、できるだけ障害者やその家族の「生の声」に触れ、現実のこととしてイメージでき、考えていけるように説明している。また「障害」をどう捉えるか、講義とともに随時ワークシートを使い、学生自身の考えを記述することを求めている。そして授業のなかで障害児を育てる家族のストレスについても講義をしている。

本稿での分析の対象とした新聞記事の内容について、以下簡略に紹介する。

2) 題材

新聞記事「そんな愛ならいらない」。

朝日新聞の『ニッポン人脈記』シリーズ、「ありのまま生きて⑥ そんな愛ならいらない」は2007年4月23日、夕刊に掲載された。

「障害のある人が、人間らしく生きる。そんな先駆的な運動が日本でも芽生えていた。」このような書き出しで始まるこの記事は、障害児／者のいのちの重み、障害者児／者が「普通に生きる」ということを、「青い芝の会」や障害を抱える当事者の運動を通して、読者に問うたものである。

1970年5月に30歳の母親が脳性まひの2歳の娘をエプロンのひもで絞め殺す事件がおき

た。母親に同情する人たちの減刑嘆願運動に対し、「青い芝の会」の横田弘は司法当局に意見書を出した。「厳刑になることは、僕たちの存在が、社会で殺してもいいということ」。「母親を憎む気持は毛頭ない。だが罪は罪として裁いてほしい」。横田も脳性まひを抱えている。横田は「かわいそうだから障害児を殺した方がいいという、そんな愛ならば、いらない」と主張する。「障害者は当たり前生きてはいけないのか、差別するな、と、それだけです。僕たちが言いたいのは」。

障害者の「ふつうに生きる」権利、尊厳を考えさせられる記事であろう。

4. 方法

1) 対象者

本校の2020年度2学年生、同意書により調査協力への了解を得た125名。保育士、幼稚園教諭の資格取得を目指す学生たちである。

2) 実施時期と提示方法

15回講義の7回目に新聞記事を配布し、ワークシートの設問への記述を求めた。9回目の講義時に回収した。遅れての提出もあったが、未提出は1名であった。

この時期までに「保育とは」「障害とは」という章立てで、保育の役割や障害構造などを講義している。また様々な障害の特性や配慮に関しての講義も進行中の時期である。

ワークシートでの設問は以下である。

「障害」を抱えることについて…いのち、生きること考えましょう。

1「母よ殺すな」新聞記事を読んでどのようなことを感じましたか

3) 倫理的配慮

各クラスごとに研究として活用したい旨を授業時に伝え、了解を得た。また下記の同意書で了解を確認した。

<研究協力のお願ひ>

「障害」について若い方々が感じていることを理解し、差別などが軽減することを考えていくた

め、そして今後の授業に役立てるため、下記のワークシートを研究のデータとして使用させていただきます。

ワークシート④…「障害」を抱えることについて(第9回授業時)

ワークシート⑧…まとめ(第15回授業時提出)

研究論文としてまとめる予定です。個人の名前が出ることはありません。また協力の有無によって不利益が生じることはありません。

データとして使用することを

了解の場合は○

だめな場合は×を

□に記入してください。よろしくお願いいたします。

5. 結果と考察…記述の解釈

本稿ではワークシート④の設問1を分析対象とした。

まずすべての記述を読み、内容の要点(項目)を整理した。その観点から印象深い記述を抜き出し筆者の解釈や学生の気づきを分析した。「印象深い記述」というのは、深い内省、自分なりの考え、自身の体験からの気づき、本質的な問いかけ、などが感じ取れたものである。

各記述はアルファベットで区分した。抜き出した記述の後に行を変え、*マークをつけ、筆者の解釈や考察などを記している。

記述した本人の表現、文字づかいをそのまま表記した。ただし、明らかな誤字や文法ミスは修正した。また意味が通じるよう補足したところは括弧書きにしている。

以下、大枠となる項目ごとに記載していく。

項目は、<いのちの重み>、<社会の理解の重要性>、<理解し合う…障害を持つ人の声を聞く>、<差別・偏見>、<ありのままに生きる・当たり前・「普通」とは>、<実習での体験とのつながり>、<保育者として>である。

(1) <いのちの重み>

A・私はこの新聞記事を読んで、脳性まひの2歳の娘を殺した母親の厳刑をするのはおかしいと思いました。なぜなら、障害の有無に関わらず同じ人間であることに変わりはないと考えるからです、横田さんの発言のように、この事件での厳刑は障害を持つ人全ての存在価値を下げることになると思います。障害は持ちたくて持つものではなくて、持っている人は障害と向き合い一生懸命生きていると思います。

障害年金や作業所など形のあるものだけでなく、多くの人が障害についての理解を深めることで、障害を持つ人がより生きやすくなるのではないかと感じました。

もし自分がもっていたらどうするか、またどうしてほしいのかをよく考えることが大切だと思いました。

*いのちの重み、人としての存在価値は障害の有無にかかわらず、全ての人に変わらないものである、ということが述べられている。障害を自分のこととして捉え考えていくことの大切さに気づいている。

B・脳性まひの2歳の娘をエプロンの紐で絞め殺す事件、本当に悲しくてかわいそうだと思います。障害をもっているからといってかわいそうだから殺すというのは人としてありえない行いだと感じました。障害をもっている、一人の人間として人権もあるし生きる権利もあるから、殺して存在しないもの（人間）とするのは違うなと思いました。障害をもっている人も、障害をもっている人なりに日々の生活の中で差別されたりと悲しみや苦しみを抱えながら一生懸命生きているので、それを障害をもっていない人が相手の人生を壊すというのは大きな罪に当たるのではないかと感じました。

*いのちの重み、人としての存在価値は障害の有無にかかわらず、全ての人に変わらないものである、ということ。障害をもつ人が障害を抱えながら一生懸命生きている。その人の人生はその人のものであるということを感じ、記している。

C・障害を持つ人の命を1つの命としてとらえていないことに対して悲しみを感じた。

*いのちの重み、人としての存在価値は障害の有無にかかわらず、全ての人に変わらないものである、ということ。

D・障害者だからといって生きている価値がないから殺してしまう、そのような世の中にこれからは決してあってはならないと感じました。

*いのちの重み、人としての存在価値は障害の有無にかかわらず、全ての人に変わらないものである、ということの主張である。

E・新聞記事の中で私は「かわいそうだから障害児を殺した方がいいという、そんな愛ならば、いらない」という言葉が胸につきさりました。横田さんはどうして愛と正義を否定するのだろうと思った後にこの言葉が書かれており、愛とは正義とは何だろう、誰にとっての正義なのだろうかと考えさせられました。青い芝の会の主張である「差別をするな」ということは、障害者も、関係なく当たり前生きていくことを望むもので、かわいそうだと思われないのだと強く感じました。だれもが障害をもつ可能性があるため、否定的にみるのではなく、どうしたら住みやすい環境になるのかを常に考え、支えていけたら明るい世の中になると感じました。

*「愛とは正義とは何だろう、誰にとっての正義なのだろう」という根源的な問い、この問

いは「援助」という仕事にかかわる人が真摯に自らに問わなくてはならないものであろう。その過程がなくては独り善がりな、自己満足に過ぎない援助になりかねないだろう。まだ「当たり前前に生きていく」ことが当たり前と与えられているものではないことへの気づきもあったと思われる記述である。

F・障害を持つ人のことを1人の人間として、1つの生命として考えない思想があることに恐ろしくなりました。

・健常者と障害者の隔たりがこのままなくなっていき、横田さんたちの望む、ふつうに生きていける世の中になればいいなと強く思いました。

*障害者差別の歴史や優生思想などは知らない(学んでいない) 学生たちにとって、この記事は衝撃的なものであったようである。ただ実感として捉えられるか表面的な受けとめになるかの違いは大きい。この記述は「実感」であるように感じられるし、そうあることを願いたい。

(2) <社会の理解の重要性>

G・30歳の母親が脳性まひの2歳の娘をエプロンで殺してしまったのは、娘のことが嫌になったのではなく、介護をしなければ生活できない為、24時間娘の介護に追われ精神的にも肉体的にも追い込まれていたのではないかと感じた。母親が大変だったということも分かるが、精一杯生きようとしている幼い命をうばったことには変わり無いので厳刑嘆願運動を起こすことは間違っていると思った。

・この問題は母親だけが悪いのではないと私は思った。もっと母親のことをサポートしてあげる人がいたら少し負担は軽減されるし、障害への理解がある人が増えれば、絶望的な顔をする人もいなくなるのではないと思う。みんな平等という考え方が広がれば、このよう

な事件もなくなると思う。

*母親の追い詰められた状況と心情を推察している。その上で母親の行為はあってはならないものと考えを述べている。事件を母親の責任だけと捉えず、社会の問題と考え、障害への理解の重要性を述べている。

H・日本の中で「障害」への理解が足りていないことがよくわかった。過激といわれるほど行動に移さないとこのように取り扱ってくれないと考えるととても悲しい世の中だと思った。

最近にも相模原で大きな事件が起き、犯人の供述を聞いてショックを受けた。そんな風にもることしかできないのか、そのような人がいるのかということが悲しかった。この新聞記事を読んでそのことを思い出した。

もっと優しい社会になったら良いなと思った。

*社会の「障害理解」がなされていないことへの気づき。相模原の障害者施設入所者の殺害事件を思い起こしている。過去のことではないという気づきがある。

I・障害を持った人も同じ人間なのにもかかわらず、母親が障害を持った娘を殺しても減刑になるということに対して、私は許せないことだと思いました。同じいのちを持って生まれてきたのにもかかわらず、同じように接することができないのははずかしいと思います。もっと社会全体が障害者について考えなおすべきだと思いました。差別をする人がいなくなるような社会を作っていきたいと思います。社会全員が助け合う気持ちを持って差別がなくなってほしいと思います。このような「母よ殺すな」の新聞記事のように悲しい出来事をみんながうけとめて広めていければ良いと思いました。

*社会全体で「障害」について考えることが必要。助けあいの気持ちをもつこと、それが

差別のない社会につながる。過去のできごとを過去のものとせず知ることの大切さが述べられている。

J・かわいそうだから障害児を殺した方が良いという考えをもっている人が昔は多くいたということに驚き、なんてひどいんだと思いました。しかし、今これをひどいという考え方ができるのも、青い芝の会の人達の行動が世に知れ渡り、障害がある人も人間らしく生きるという考え方が浸透してきたからなのだと思います。過激なことをしたら、印象が悪くなるだろうに、そこまでしないと気づいてもらえない、ここまでしても考え方が変わらない人がいるのが苦しいと思った。一気に変えるのは難しいが、考え方が変わった人から他の人へとだんだん浸透していき、障害のある人が人間らしく生きることがあたりまえの世の中になってほしいと思った。

＊誰しもが人間らしく生きる権利があること、しかしそのことがないがしろにされていたり、権利が剥奪されている人たちが同じ社会にいること、などへの気づき。そして人の考え方で社会のあり方が変わることへの気づき、変わることの難しさとともに考えられている。

「苦しい」という表現が印象的である。自分の苦しさのような感覚であろうか。

K・70年代と比べると、今は障害者に対する見方が変わってきていると感じた。今でも障害者の理解はまだあまりされていないと感じるけれど、もっと前まではさらに酷いものだった。また、理解して認めてもらうには、少し過激なことでもしないと、なかなかうまくいかないものだと思います。苦しいだろうと思いました。

＊「苦しい」という表現が印象的である。運動をしていた横田さんたちの心境として感じたのだろうが、同時に自分の苦しさのような感

覚であろうか。

L・横田さんや青い芝の会の行動がなければ、現在も障害者に対する考えが軽いものだったかもしれないと思うと、とても怖いと感じた。障害者が主張をしなければ、誰も何も環境を変えようとしなかった事実があることを忘れずに、他人ごとだと思わずに、平等に暮らすことのできるような政策をつくり、自分にできることをやりたいと感じた。

＊他人ごとだと思わずに自分のこととして、「障害」について考える、ということが講義の目的のひとつであり、講義でも言葉で伝えてきた。それが基になっているかもしれない。「自分にできることをやりたい」という気持ちは人として誠実であり、援助の根本であろう。

M・(厳刑嘆願運動が起こったのは) 障害を持つ人々に対しての関心がなかった時代であり、社会全体の考えが障害を持つ人に対して厳しいものであったことも影響しているのだと思いました。現在は障害を持つ人も暮らし安いうように環境づくりが進んだり、法整備もされていますが、ここまでするには障害を持つ人自身が訴えを重ね、行動したことで少しずつ変わってきたということを学び、もっと社会全体が障害を持つ人々に関心を持ち、共生していく取り組みを行っていかなくてはならないと思いました。

＊いまの社会環境や障害者施策が簡単になされたものでなく、社会からの差別や無理解との戦いであったことが学びとして得られている。「共生していく」ということを言葉だけで終わらず、共生していくということはどのようなことなのか考えていってほしい。

(3) <理解し合う…障害を持つ人の声を聞く>

N・障がい者からの意見を初めてしっかりと聞

いた気がした。自分では障がいがあるからといって差別しているつもりはないが、もしかしたら、無意識に差別してしまっている時があるかもしれないと感じた。障がいのある子どもを育てるのはとても大変なことだと思う。自分の気持ちを抑えられずに子どもに手をかけてしまったというにはとても悲しい事件だ。確かにこの記事を読むと、母親に同情する気持ちは分かる。しかし、この事件で一番良くなかったのは、障がい者の子どもでも、母親でもない。この親子をここまで追い詰めてしまった周りの環境なのではないかと思う。周りの人々がこの親子に少しでも手を差し伸べていれば、このような事件はおこらなかったのではないかと思う。障がい者やその家族にとって優しい社会をつくっていきたい。

＊生の声に触れることにより、差別してはいないか、自身への問いかけ。母親の追い詰められた状況と心情を推察している。その上で母親の行為はあってはならないものと考えを述べている。事件を母親だけの責任と捉えず、社会の問題と考え、障害への理解と周囲からの支援の重要性を述べている。「優しい社会」への期待がある。「優しい社会」とはどのような社会なのかさらに考えてほしい。

O・自分では感じていなくても無意識に障害を持っている方との違いを感じさせてしまっているのではないかと思います。

・自分から思う障害へのイメージや考えだけではなく、障害を持っている方からの考え方、感じ方を大切にしていかなければいけないと思いました。

＊生の声に触れることにより、自分の気持ちと相手に伝わるもの（感じ方など）が違うことがある、それが差別になっていることもあるという気づき。相手の考え方、感じ方を大切にする事の大切さなどが述べられている。

P・横田さんの行動力や想いの強さにとても心をうたれた。横田さんの「障害者は当たり前に生きてはいけないのか、差別するな」という言葉を聞いて改めて差別するのは良くないと思った。また、見出しにもあるように「普通に生きたい」「当たり前で生きたい」という言葉を見て、「普通」とは・「当たり前」とは何かを考えさせられた。バスに乗ったり電車に乗ったりすることは私たちにとって当たり前だが、障害者というだけでその当たり前が当たり前ではなくなってしまう。また、母親が娘を殺してしまった事件では、母親に減刑を求める声があったと知りとても驚いた。「減刑をすることは殺しても良い存在ということ」と横田さんが言っているように、皆に平等にある「生きる権利」を奪われているような感じがした。この当たり前が奪われてしまう世の中ではとても生きづらいと思う。従って、わかり合うためにも、障害を抱えている人の声を聞くなどして、双方の理解が必要になると思った。

＊「普通」とは・「当たり前」とは何かを考えさせられた、この問いを忘れないでほしい。立場によって「当たり前」が社会により奪われ、普通に生きることができなくなる。「普通」とは誰にとってもあるはずのものであるのに、障害されていく。それは「生きる権利」をも奪っていきかねない。「わかり合うためにも、障害を抱えている人の声を聞くなどして、双方の理解が必要になる」と書いている。どちらからだけでの理解では一方的なかわり、一面的な理解で終わってしまう。互いの理解が平等な社会に必要である。

Q・心がとても痛くなりました。私も今まで障害者で車いすで生活している人を見て大変そうだし、かわいそうだと思って見るが多かったです。また、買い物の際、自分が急いでいて、目の前の車いすの人の行動が遅いと少しイラ

ついてしまうことがあります。でも、今回の新聞を読み、障害者の方や、車イスの人は正直、歩きたいという思いや地面に足をついて走りたいという思いもあると思います。私だったらポジティブには考えられないと思います。でも、横田さんは「青い芝の会」を作り、つらいことがあっても生きていて、すごく見習いたいと感じました。今後は、障害者がかawaiiそうだと思う、一人の人間として接し、自分ができることがあれば手助けしていききたいと思いました。

＊記事から自分自身の行動や意識の振り返りがなされている。他者理解に大切な内省である。「一人の人間として接し、自分ができることがあれば手助けしていききたいと思いました」、これは大事な気持ちである。

R・障害をもっているからといって、人生に絶望しているとか、「かawaiiそう」を求めているとか、そのようなことではないんだと感じました。ただ1人の人間としてみられたいという強い気持ちを感じました。脳性まひの2歳の娘を殺してしまった母親の事件は、「障害者だから仕方ない」というような気持ちが母親に同情する人たちにあるのではないかと思います。私はそれを感じて、酷いと思いました。それは今障害について学んでいて、障害を持つ方の視点からであると考えました。この新聞記事を以前の私が日常の中で読んでいたら、母親に同情していたかもしれません。障害を持つ方について理解すること、気持ちを理解することは、とても難しいと感じました。

＊「ただ1人の人間としてみられたい」という切実な願いを文面から汲みとっている。深い理解である。また脳性まひの2歳の娘を殺してしまった母親の事件についても、自分の感じたことだけで終わらず、なぜそう考えたのか、感じたのかも考えている。それは自分の考え

の見直しであり、異なる視点も視野に入れることがなされる。理解を深めていける。

「なぜそう考えたかも述べる」ことを講義で伝えてきた。それが基になっているとしたら、喜ばしい。

S・障害を持つ人たちが積極的に人前で話したりすることは、世の人たちに障害について知ってもらえる機会になると思いました。障害者の方の実際にあった出来事や苦悩を聞くと、改めて生活の大変さなどが感じられ、その人経験した感動も伝わり、障害者の方の為に出来ることは何かと考えるきっかけになると感じました。

＊できごとやその時の心情が体験した本人の声で語られることの訴える力の大きさと、実際の声を知る（聴く、見る・読む）ことが考えていくきっかけを開くことがうかがわれる記述である。

(4) <差別・偏見>

T・障害を持った人も同じ人間なのにもかかわらず、母親が障害を持った娘を殺しても減刑になるということに対して、私は許せないことだと思いました。同じいのちを持って生まれてきたのにもかかわらず、同じように接することができないのははずかしいと思います。もっと社会全体が障害者について考えなおすべきだと思いました。差別をする人がいなくなるような社会を作っていきたいと思います。社会全員が助け合う気持ちを持って差別がなくなってほしいと思います。このような「母殺すな」の新聞記事のように悲しい出来事をみんながうけとめて広めていければ良いと思いました。

＊（前述したIの記述を「差別・偏見」の視点から分析した）

バリアフリーが進む社会で生活していて、障害者差別がいま以上に大きく、いわれのな

い偏見があった時代を知らない学生は少なくない。負の面は語られることがなく、明るい面だけが話題にされていきがちな社会である。「差別をする人がいなくなるような社会」となるには、「悲しい出来事をみんながうけとめて」なぜそのようなできごとが起こったのかや、「いのち」や「人権」などについて考えていくことが必要であろう。

U・70年代は、障害を持って生まれた子ども＝可哀想、不幸な子どもという考え方が一般的であったということがこの新聞からわかり、とても悲しい気持ちになった。障害があるからといって、必ずしも辛い苦しいことばかりではないし、周りの環境や関わる人、その人の生き方次第で人生は楽しいもの、幸せなものに変えることは可能であると思った。「障害があるから…」という目で見ること時には大切だけれど、障害の有無は関係なく、その人自身がどう生きていくかによって、人生を楽しめるかは変わってくるため、障害に対しての偏見がなくなれば、障害がある人でも生きやすい社会になると思った。

＊「障害を持って生まれた子ども＝可哀想、不幸な子どもという考え方」はいまもなくなってはいない。そのことに目を向けるよりも「障害の有無は関係なく、その人自身がどう生きていくかによって、人生を楽しめるかは変わってくる」というように考える学生が多数であるように感じる。色々な見方ができること、答えはひとつではないことを伝えていくことが教育のなかで重要である。「障害に対しての偏見がなくなれば、障害がある人でも生きやすい社会になる」という意見はシンプルであるが、その通りであろう。

V・今は、障害のある人に対しての法律や設備が整っているが、以前は障害のある人への差別が大きかったことを初めて知った。「青い芝」

の人たちのやり方は、少し過激だと感じる部分も多かったが、それほど、障害のある人たちからしたら、社会を変えていきたいという思いが強かったのだと感じた。しかし、このような活動をたくさんしてきたからこそ、現代の設備や整備ができてきたのだとわかった。

＊「障害者差別」がある、あったことを知らない学生も少なくなく、この記事はショッキングなものであったようである。「障害」「障害者」と「社会」について考える契機になっていくことが望まれる。

W・新聞記事を読んで、障害は社会で生きる上では邪魔だといわんばかりの厳刑運動が行われていたことを知り、とても悲しくなった。車いすでバスの乗車を拒まれるなど絶対にあってはならない。「支援が必要な人＝邪魔」ではなく、「＝皆で支えていく」という考え方に代わってほしいと思った。

疑問として、邪魔と思っている人が障害者になってしまったら、どのような気持ちになるのだろうか。きっと邪魔者あつかいされて、やっと(気づくのだろうか)

＊「邪魔と思っている人が障害者になってしまったら、どのような気持ちになるのだろうか。」大事な疑問である。「もし自分だったら…」と考えることが他者理解につながる。「支援が必要な人＝邪魔」ではなく、「＝皆で支えていく」という考え方に代わってほしいと思った、と書かれている。その通りであろう。そのためにはどうしたら…とさらに考えていけるような授業を考えていきたい。

(5) <ありのままに生きる・当たり前・「普通」とは>

X・現代は障害のある方でも生活がしやすいよう、バスや電車では障害者、高齢者、妊産婦用の席やバリアフリーなど多くの場所がある

が、昔は障害者に対する差別などがあり、障害のある方を殺すなど現代ではありえない言動があったのだということに驚いた。障害というのは障害を持ちたくてなるわけではないので、障害のある人を見かけると心が痛くなります。障害を持っていても健常者と同じように生活して生きている人もいますので、障害者に対し、強い言動やかなしい気持ちになる言動はしてはいけないうし、自分に置き換えたら辛いと思います。だから、障害を持っていてもありのままに生きるというのはとてもすばらしいことだと思います。

*障害者に対する差別が社会全体にあったということをこの記事で初めて知り、驚きとつらさを感じたことが述べられている。「障害を持っていてもありのままに生きるというのはとてもすばらしいことだと思います。」というのは、つらい状況のなかでもありのままに生きようとする強さを素晴らしいと感じているのか、障害を抱えていてもその人らしくありのままに生きていくことができる社会が素晴らしい（だからそのような社会を）と考えているのか、または別の意味なのか。本人のなかでも漠然としているのかもしれない。大事な観点である。突き詰めて考えていってほしい。

Y・障害を持った人を見た時に多くの人は「かわいそう」と言うが、障害を持っている人からすると自分のことを「かわいそう」とは思っていないかもしれない、ということはこの記事を読んで考えた。

社会を生きていく上で、体が不自由だったりとハンデを抱えながらも懸命に生き、その中で「青い芝」の人たちは社会に訴えようとしていた。同じ人間であるのに障害者であるからといったようなことは本人たちからすれば、差別になるのかもしれない。

*「障害者だから…」と一括りにして「…だろう」

と決めつけてみるのが、差別を引き起こす。「同じ人間であるのに障害者であるからといったようなことは本人たちからすれば、差別になるのかもしれない。」

これは大きな気づきである。

Z・「足を動かさない」「うまく言葉を発せない」、たったそれだけのことがその人自身の“人生”を左右してしまう。しかしそれはその人自身だけでなく、社会や周りの人たちが時には仕向けてしまうことがある。横田さんの「絶望はしていない」という言葉に強く胸を打たれました。私がこうしたいと思うことも我がままにすぎない。障害者にとって普通に生きるということがどういうことなのかを、まず普通を普通に思っている人たちが理解することが大事ではないかと思いました。1人1人の「生きる」ことを誰も邪魔してはいけない。ましてやその人の“価値”を他人が決めては絶対にいけないと思いました。

*障害者が「普通」に生きることを阻んでいるものは何なのか。何をもって「普通」というのか。ひとりひとりが考えていくべきことである。それは人それぞれの存在価値を尊ぶことに必要な問いかけであろう。

a・私は、すべての人間が姿、性格、境遇など何もかも同じでなければ、差別をなくすことは難しいと考える。けれど、人間は考える力、想像する力があるのだから、みながより添う心を持つことができれば差別は減ると思う。人間は優劣をつけたがる。劣勢のものは排除をしたがる。そのような考えを無くして、誰もが生きやすい社会を作ろうと、尽力する横田さんの行動力に強く共感した。このような行動を起こさなくても、平等な世間になるように、思いをストレートに伝える姿にありのままに生きる大切さを感じました。

＊ひとりひとり違う人同士が、尊重しあい、支え合い生きていくには、自分と違う他者のことを「考える力、想像する力」がなくてはならない。「思いをストレートに伝える姿にありのままに生きる大切さを感じました。」と記している。ありのままに生きるには、私たちはどうしていったらよいのだろうか。ありのままに生きようとしている人を手助けしていくことはどうしたらできるのだろうか。

(6) <実習での体験とのつながり>

b ・たとえば、障害者であったとしても生きてはいけないなどということは決してなく、障害者がいるからこそ成り立っていることもあると思いました。

・障害者施設に実習に行って障害者に対する見方が変わりました。障害者でも一人ひとりしっかりと生きているのだなと思いました。健常人一人ひとりが障害者に対する見方をもう一度よく考え、障害者に優しい世の中になってほしいと思いました。

＊生産性ばかりが重視され、人の価値を評価しようとしがちな現代社会の歪みがある。「いのち」にも優劣をつけようとしている面もある。「障害者がいるからこそ成り立っていることもある」。この言葉はとても大事なものである。実習で体得したことがこの記事で明確になったと思われる。

c ・(障害者施設の) 実習に行くまでは私自身も障害を持っている方に対し偏見を持っていた。しかし行ってみると障害を持っているからといって私たちと何も変わらなかった。この記事を読んで改めて障害を持っている人に対し偏見を持ったりするのはやめようと思った。

＊自分自身のなかの偏見・差別が実習で障害を抱える人とかわったことで、修正された。「この記事を読んで改めて障害を持っている人

に対し偏見を持ったりするのはやめようと思った。」とあり、体験と講義での学びが結びついたように思われる。体験を言葉として表せることは、体験をより明確にし確固たるものにしていく。

d ・誰もが障害を持つ可能性があるのにみためが違うからといって排除しようとするのはやはり違うなと思いました。2月に施設実習に行った際、私たちのことを笑顔で迎え入れてくれ、自分のしている作業のことを楽しそうに利用者の方は教えてくださいました。施設実習を通して、普通に普通じゃないかと差別していることは恥じるべきだと思いました。

＊「誰もが障害を持つ可能性があるのにみためが違うからといって排除しようとするのはやはり違うなと思いました。」という記事から感じたことと、実習で学びとったことがつながっている。それが言語化されている。

e ・周りの人は障害に対しマイナスな考えを持ってしまっているのだと思う。私も前までそうだったが施設実習をして考え方が変わった。障害について“考える”“関わる”機会があれば少しは変わるのではないかなと思う。今の現状をメディア等を通して伝えることが大切。

＊実習での体験とこの記事がつながり、障害について“考える”“関わる”機会の重要性が認識された。

(7) <保育者として>

f ・新聞記事を読んで、横塚さん、横田さんの意見を世の中に広めたいと思った。

・私が保育士になったら、このように母親の負担が大きくなり、子どもを殺したり、傷つけたりすることがなくなるよう、相談に乗ったり、アドバイスをしたり、関係機関と連携をとり、適切な対応ができるようになりたいと

思った。

＊保育士として親の子育て支援が重要な役割であることを講義で伝えてきた。そのことがこの記事で改めて認識されたように思われる。

g・保育者として障害児への関わりはもちろん、健常児が全ての人の命を対等にあつかい、思いやれる心を育てていきたい。

＊障害児保育は障害を抱えるこどものためだけでなく、健常児のためのものでもあることが、理解されているように思われる。

6. まとめ

今回題材とした記事から浮き上がってきたものは、学生たちの視点である。それは項目として揚げた、＜いのちの重み＞、＜社会の理解の重要性＞、＜理解し合う…障害を持つ人の声を聞く＞、＜差別・偏見＞、＜ありのままに生きる・当たり前・「普通」とは＞、＜実習での体験とのつながり＞、＜保育者として＞である。

＜いのちの重み＞については、母親が2歳の我が子（脳性まひ）を絞殺した事件、それに伴う減刑嘆願運動、横田さんの「かわいそうだから障害児を殺した方がいいという、そんな愛ならば、いらない」という言葉、減刑嘆願運動は障害者のいのちを軽んじる意識であるという指摘などが、学生に重く受けとめられ、考えるきっかけを与えた。

筆者は、2016年度の紀要で「障害児の親になる」ことをどのように考えるか、を論じた（関谷 2017）。そこで見出された学生の意識のひとつに、「いのちの重み」がある。

「出生前診断で「生まれてくる子が障害（肢体不自由、障害の程度は不明、知的な遅れを伴う可能性もある）を抱えている可能性が高い」と言われた場合、あなたはどうしますか。（母親として、または父親として、考えてください。）」と

いう設問に、障害児であっても「産む」「産みたい」という意志がみられたのは、163名中127名であった。「障害児の親になる」という選択の要因として「いのちの重み」が見いだせた。そこには、「自分を親として選んできてくれた」というその子との強いつながりを感じている表現がみられた。また「我が子」という呼び掛けも多く、「母性」を感じさせられる。「いのちを殺すことはできない」という意識も強くみられた。

＜社会の理解の重要性＞、＜理解し合う…障害を持つ人の声を聞く＞、＜差別・偏見＞、＜ありのままに生きる・当たり前・「普通」とは＞、＜実習での体験とのつながり＞は、「障害・障害者理解」にかかわるものである。

筆者は「障害・障害者理解」についてこれまでの紀要でも考察し、論じている（関谷 2013-b, 2014, 2016, 2017, 2018）。そこでも実習での体験で自身の偏見に気づいたり、「障害・障害者理解」に目を向けるきっかけになっていることが記されていた。また「障害」「障害を抱える人」について知ること、自分のこととして考え、理解しようとするものの大切さに目が向けられていた。

「保育者として」、そして「人として」どうか、どうありたいかも、これまでの記述にみられている。

自身のこととして「障害」を考え、理解していくことが、障害を抱える人の「援助」の根本である。それは「援助」という関係においてだけでなく、人と人とのつながりの根本でもあろう。

新聞記事のみでなく、自分たちが向き合おうとする人たちの「生の声」を知ることが、こころに刻まれ、表面的ではない理解につながる。そして実習などでの実体験や「学び」による知識の積み重ね、それらがつながることが大切であり、つなげていくような「教育」がなされていくことが必要である。

今後も「障害とは」「障害への理解」について考えていきたい。

【文献】（アルファベット順）

関谷眞澄「保護者・家庭への支援」青木豊編『障害児保育』一藝社 2012 年

関谷眞澄『障害との共存 精神障害を抱えて生きる』クオリティケア 2013 年

関谷眞澄「保育士を目指す学生の「障害」観に関する一考察 障害児保育にかかわる「保育者」として」千葉敬愛短期大学紀要 第 35 号 2013 年 -b

関谷眞澄「障害児のきょうだいの不安とストレス」千葉敬愛短期大学紀要 第 36 号 2014 年

関谷眞澄「学びから得た「障害」についての理解 学生による自由記述からの考察」千葉敬愛短期大学紀要 第 38 号 2016 年

関谷眞澄「学びから得た「障害」についての理解 - その2 「障害児の親になる」ことをどのように考えるか」千葉敬愛短期大学紀要 第 39 号 (2) 2017 年

関谷眞澄「障害の理解へのアプローチ 児童文学作品を活用しての授業」千葉敬愛短期大学紀要 第 40 号 2018 年

関谷眞澄「家族支援と理解」青木豊・藤田久美編 新版『障害児保育』一藝社 2018 年

朝日新聞 人脈記「ありのままに生きて⑥ そんな愛ならいらない」2007 年